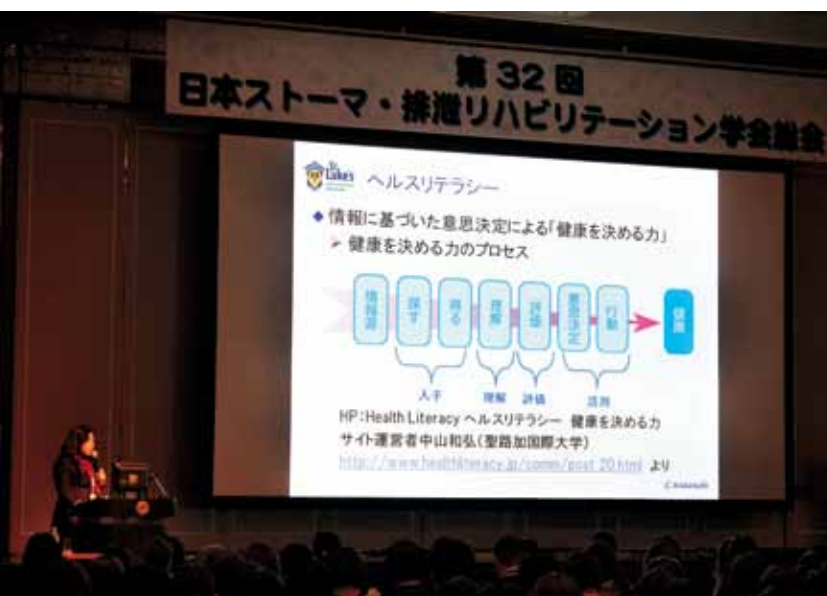


# ストーマケアに役立つ 知識・情報の整理と活用の提案

共催：第32回日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会総会／アルケア株式会社



患者の自己決定権やヘルスリテラシーなど、ひと昔前にはあまり耳にすることもなかった言葉が、昨今、医療現場で当たり前のように使われ始めている。しかし、それらが正しく行えるだけの環境は整っているのだろうか。

本セミナーでは、前田耕太郎先生（藤田保健衛生大学消化器外科主任教授）の司会のもと、皮膚・排泄ケアのエキスパートお2人にご登壇いただき、ストーマケアにおける情報提供の実態と課題、今後の展望についてお話しいただいた。



司会：前田耕太郎先生

藤田保健衛生大学消化器外科主任教授

講演1：渡邊千登世先生

聖路加国際大学大学院看護学研究科博士後期課程看護管理学専攻／皮膚・排泄ケア認定看護師

講演2：松岡美木先生

埼玉医科大学病院看護部、褥瘡対策管理室／皮膚・排泄ケア認定看護師

## 講演 1

## ストーマケアにおける 情報リテラシーの マネジメント



渡邊千登世

聖路加国際大学大学院  
看護学研究科博士後期課程  
看護管理学専攻／  
皮膚・排泄ケア認定看護師

### ヘルスリテラシー向上の支援が 医療従事者の役割

情報リテラシーやメディアリテラシー、コンピューターリテラシーなど、昨

今、「リテラシー」という言葉を耳にする機会が増えています。「文字(letter)」から派生したこの言葉は、本来「読み書き能力」を意味します。しかし、文字が

読めて理解できさえすればよかった時代とは違い、情報化の進む現代ではより深い意味合いを持つようになってきています。例えば情報リテラシーとは、問題解

決や意思決定の必要が生じたときに、情報を効果的に探し出して評価・活用できる能力のことを指します。

情報リテラシーには4つの能力が求められます。自分に必要でかつ適した情報を探して「入手」する力、その中身を「理解」する力、集めた情報の中から信頼に足るものを選別するために「評価」する力、それらを実際に「活用」する力です。この「活用」という大事な局面において必要とされるのが、意思決定をして行動に移す力です。

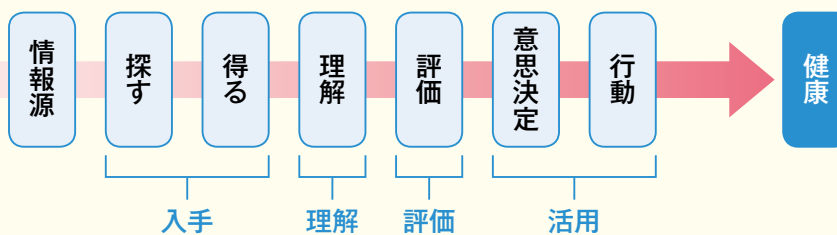
近年、医療やヘルスケア領域において中心的な概念と捉えられるようになったのが、情報に基づいた意思決定により「健康を決める力」、すなわち「ヘルスリテラシー」です。「情報の入手→理解→評価→活用(=情報リテラシー)」の段階を踏んで、健康に向かっていくというのがその定義です(図1)。

2010年に米国保健福祉省が発表した『ヘルスリテラシー改善のためのナショナルアクションプラン』<sup>1</sup>では、誰もが意思決定を助ける健康情報にアクセスする権利を持つこと、健康や寿命、QOLに有益であるよう、ヘルスサービスはわかりやすく提供されるべきであることが原則に掲げられています。情報を発信する側にあるわれわれ医療者は、患者の意思決定にどうかかわるべきなのでしょう。

例えば「情報源」においてはエビデンスに基づく質の高い情報を提供すること、「探す、得る」では良質な医療情報の探索ができるよう支援すること、「理解、評価」に対しては、コミュニケーション力を発揮し、個々の理解力に応じた説明を行うことで情報の吟味を助けること、そして「意思決定、行動」の場面では、意思決定が適切に行えるよう支援し、それを行動に移せるよう見守ることなどが挙げられます。

図1 ヘルスリテラシーとは

- 情報に基づいた意思決定による「健康を決める力」
- 健康を決める力のプロセス



Health Literacy ヘルスリテラシー 健康を決める力  
中山和弘(聖路加国際大学) [http://www.healthliteracy.jp/comm/post\\_20.html](http://www.healthliteracy.jp/comm/post_20.html) より引用追記

### 情報不足と情報過多の混乱の中 患者をナビゲートする

情報リテラシーをめぐっては克服すべき課題がいくつかあります。

まず、医療従事者と患者との間にある知識や情報量の不均衡、すなわち「情報の非対称性」です。パターナリズム(父権主義)全盛のころは「先生にお任せ」で済んでいたことも、自己決定が重視される現代においては、情報量の差はさまざまな軋轢を生じます。そこには、必要な情報が十分に提供されていない、患者の情報探索能力を支援できていないといったインフラの未整備や、患者自身のリテラシーの低さも影響します。

一般市民5,000人を対象とした厚生労働省委託「健康意識に関する調査」<sup>2</sup>によると、健康情報の入手経路はテレビ・ラジオ、インターネット、新聞、かかりつけの医師の順に多く、それと相反して、情報源に対する信頼度は、かかりつけの医師、大学や病院・診療所、家庭向け医学書の順に高くなっています。インターネットなど接触度の高い情報への信頼度はきわめて低く、逆に信頼のおける医療者や専門機関からの情報が十分に得られ

ていない実態がうかがえます。

さらに別の調査では、健康・医療情報の活用能力が「不足」「問題あり」とされる日本人(1,054人)は85.4%にもほり、欧州8か国(約8,100人)平均の47.6%と比べ、きわめて高いことが示されています。とりわけ日本人が困難に感じるのが「メディアの健康情報に対する信頼度の判断」(61%)や「医師の説明への理解」(44%)です<sup>3</sup>。

また、情報不足が比較選択による意思決定を妨げる一方で、情報化の進展による情報過多がかえって情報の理解・評価を難しくし、個別性の高い良質な情報に出合う機会を遠ざけてしまっています。

こうした状況を鑑みれば、個々の情報処理能力を見きわめたくうえで、信頼性の高い情報を手に入れる方法をナビゲートすることも医療者の大切な役割ではないかと思えます。

例えば、がんについて知りたいのであれば、国立がん研究センターのがん情報サービスなど各専門家が発信する医療情報サイトを、体験者ならではの情報を求めるなら、日本オストミー協会や患者の語りのサイトを案内できます。ネット利



用に不安をおぼえる人であれば、地域に公開している医療系大学の図書館もお奨めです(表1)。

### ストーマケアの「知りたい」に応える 新たな情報源の構築が急務

ところで現在、ストーマケアに関する情報提供は十分なのでしょうか。ストーマ保有者が聞きにくいと躊躇する性の情報に関してみてみましょう。

日本ET/WOC協会会員の看護師を対象とした「性相談の実態調査」<sup>4</sup>では、回答のあった204名中121名(59.3%)が、過去にストーマ保有者本人あるいは家族から性に関する相談を受けた経験があると答えています。また、ストーマ保有者に普段から提供している助言内容の記載があったのは97名(47.5%)であり、過去に相談を受けたことのある人の記載率が有意に高かったことが報告されています。なお、業者や病院が作成したパンフレットを渡すと答えたのはわずか9名でした。

具体的な相談内容をみると、「勃起機能不全」や「射精障害」などの身体的変化に加え、「心理的ダメージ」や「性行為の可否」、「パートナーとの関係の変化」、「性

行為時の留意点」など多岐にわたっています。こうしたニーズに対して、ウェブサイトや患者向けの冊子では、どのような情報が提供されているのでしょうか。

あるホームページを例にとると、「女性の場合、性機能が損なわれることはありません」と書かれています。「これは事実なのか」という疑問もさることながら、数行の説明文の最後は、「妊娠・出産を希望する場合、医師に相談しましょう」「男性の場合、ストーマ外来に相談してみましょう」で締めくくられています。また、性交時のマナーについても、「雰囲気づくりをしましょう」程度の記載しかなく、これでは患者さんが本当に知りたい内容に対応できているとはいえないでしょう。

情報発信側であるわれわれ医療者は、正しい知識はもちろん、患者の求める生活に即したきめ細かな情報、そして医療者がすぐさま臨床に生かせる実践的な情報を集約する立場にあります。そのような情報源を構築する際には、患者と医療者双方の支援が必須で、これからの情報ソースには、信頼できるコンテンツとともに柔軟性のあるシステムが求められています。

### 表1 患者の医療情報 探索を支援する

#### 質の高い情報(ウェブサイト)への アクセスを紹介

- **病気(がん)について**
  - ▶ 国立がん研究センターがん情報サービス <http://ganjoho.jp/public/index.html>
  - ▶ がん情報サイト: 先端医療振興財団臨床研究情報センター <http://cancerinfo.tri-kobe.org/>
- **診療のガイドライン(医療の標準)**
  - ▶ Minds(マインズ)医療情報サービス <http://minds.jcqhc.or.jp/>
- **薬に関する情報**
  - ▶ 医薬品医療機器総合機構情報サービス <http://www.pmda.go.jp/>
- **患者会や闘病について**
  - ▶ 日本オストミー協会(JOA) <http://www.joa-net.org/>
  - ▶ ディベックス・ジャパン(DIPEX-Japan) 健康と病の語り <http://www.dipex-j.org/>
- **学会の情報**
  - ▶ 日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会(JSSCR) <http://www.jsscr.jp/>
  - ▶ 日本創傷・オストミー・失禁管理学会 <http://www.etwoc.org/>
- **図書館の活用**
  - ▶ 公共の図書館の活用
  - ▶ 地域に公開している医療系大学の図書館
  - ▶ 病院施設の患者図書館

## 講演 2

# あつたらいいな! 身近に使える ストーマケアの最新情報



### 松岡美木

埼玉医科大学病院  
看護部・褥瘡対策管理室/  
皮膚・排泄ケア認定看護師

### 情報格差の拡大で重要性を増す 医療従事者のかかわり

この15~20年の間にストーマケアの情報源は大きく様変わりしています。

1999年、私が皮膚・排泄ケア認定看護師認定を受けた年のインターネット普及率は21.39%でした<sup>5</sup>。医療従事者がストーマケアに関する情報を得る手段として

いたのは、最新の雑誌や書籍、学会や学会誌、認定看護師同士の横のつながりでした。ストーマ保有者の情報源もインターネットではなく、医療者や患者会、装



具販売店が主でした。

2013年になるとネット普及率は86.25%に達し<sup>5</sup>、「ストーマケア」でキーワード検索をかけると、じつに108万件がヒットします。

いまやネット環境さえ整っていれば、誰もが自由に、膨大な量の情報にアクセスできる時代です。しかしこれは裏を返せば、ネットが使えなければ手に入る情報も限られるということです。

日本オストミー協会が2010年に実施した「第7回オストメイト生活実態基本調査」<sup>6</sup>によると、オストミー情報の入手先として最も多かったのは「販売店からの案内」(49.5%)で、次いで「医療(従事者)」(25.5%)、「オストメイト」(20.5%)と続き、「メーカーのホームページ」はわずか7.2%でした。医療者はストーマ保有者の情報源として依然として重要な役割を担っているといえます。

### 医療者向け情報で重要なのは すぐに実践に生かせること

医療者が提供するストーマケアの情報は、その多くが書籍やインターネットから得た知識や自らのケア経験に基づいています。そのため、誰がケア支援を行うかによって提供される情報の質に差が生じる恐れがあります。また、困りごとを即座に解決に導く情報が網羅されていない、情報を臨床の場に生かすノウハウが不足しているなどの課題も残っています(表2)。

例えば、ストーマのセルフケア能力の見きわめには、視力や聴力、ADL、手先の器用さなどの身体的特徴の評価が不可欠ですが、手先の器用さを判断する際には、「缶のプルトップを自力で開けられますか」「みかんの皮をきれいにむけますか」など身近な質問を投げかけることによって、確実にアセスメントする必要があります。

## 表2 医療者からのストーマケアの情報

- 書籍、インターネット等からの情報やケア経験を基にストーマ保有者、家族に提供される
- ケア支援を行う医療者により、提供される情報の質に差が生じてしまう場合もある
- 医療者向けの書籍、コンテンツは多くあるが、医療者が困ったときに必要とされる情報が網羅できていない
- 得た情報を応用して、臨床現場での実践に結びつける手法の不足

## 表3 ストーマ保有者が必要とする情報

- 年齢、性別、病状、術後の経過年数により変化する
- 個別性のある情報提供を求めている
- ストーマ保有者、家族が自ら積極的に情報を得ようとしなければ得られない現状がある
- 環境によって、得られる情報には差がある
- 医療者向けと一般向けの情報は「どのくらい違いがあるの?」と思っている

このように、医療者向けの情報は、すぐに臨床現場に生かせるよう、教科書的な内容から一歩も二歩も踏み込んだ「具体的な手法」を示すことが重要です。

### 個別性と実用性を兼ね備えた ストーマケアの新情報サイト

一方、ストーマ保有者が必要とする情報は、年齢や性別、病状によって異なり、術後の経過年数によっても変化します。きわめて個別性の高い情報が求められているにもかかわらず、現状では、ストーマ保有者や家族が積極的に探索に動かない限り、情報にたどり着くことはできません。その結果、必要な情報が得られない人がいる一方で、医療者向けと一般人向けのコンテンツが分かれていることにさえ不満をおぼえる人がいるかもしれません(表3)。

もちろん、医療者もストーマ保有者も

家族も、必要な情報を、内容に差がなく得られることが理想です。なおかつ、手にした情報は自分で工夫や応用をしなくても、即、実践に移せることが肝要です。

この「ありそうでなかった」情報の発信を目指すのが、現在構築中の『ストーマケア情報サイト』です。医療者と患者の情報共有がコンセプトである本サイトは、医療者向けの情報とストーマ保有者のための情報をリンクさせ、双方が行き来できるような仕組みになっています。ストーマケアの新しい情報源としてご活用いただけるものと思っています。

#### 〈引用文献〉

1. National Action Plan to Improve Health Literacy (2010), U.S. Department of Health and Human Services.
2. 厚生労働省委託「健康意識に関する調査」(2014年2月実施).
3. 毎日新聞 2014年11月18日東京夕刊.
4. 日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌 2010;14(2):230-238.
5. GLOBAL NOTE 出典:ITU(International Telecommunication Union).
6. 日本オストミー協会「第7回オストメイト生活実態基本調査報告書」(サンプル数572、平均年齢71.1歳).